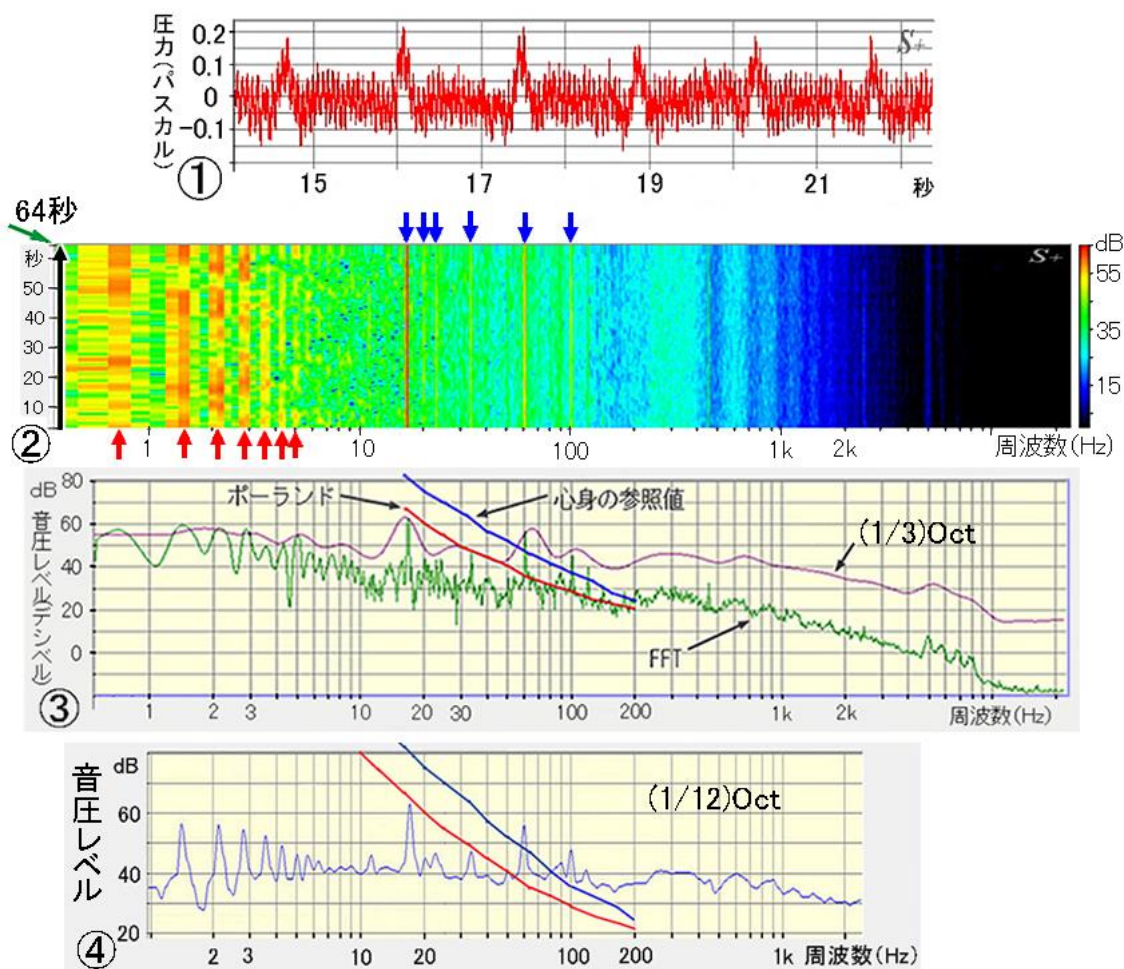


ここでは、図3、図4、図5、図7をカラー表示で示す。なお、それぞれの図に関連する補助資料も掲載した。

「図3 西端風車からの音のFFT法による全時間分析図」

「図4 両分析法の断面図と参照値等の環境基準」

に関連した補助資料と一緒に示す。



測定された音（原音）を①に示す。1.4秒間隔の突発音はその時間幅が0.2秒程でその間に0.3 Pa（パスカル）程音圧が変化する。この変動の上に1秒間に16個（16 Hz）ほどの低周波音が乗っているのが数えられる。

②③④の図は、上下の図の周波数位置を合わせ、音のピーク位置の対応を揃えてある。

本文図3のカラー表示が②である。10Hz以下の領域に一定周波数の大きな音圧レベルの並び（倍音構造）がある。時間的に音の強弱の無い恒常的な音（純音）が10～100Hzの低周波音（LFS）領域にある。16Hzほどに大きな純音があるのが判る。

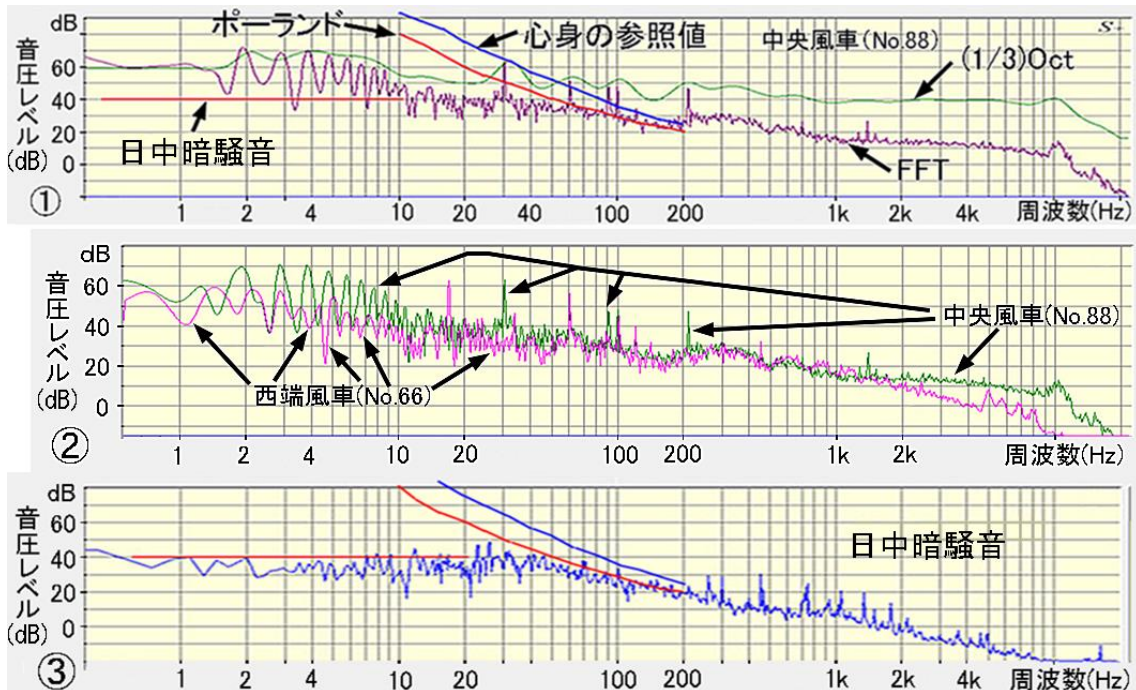
測定の最終時における断面が③である。(1/3)Oct法では、IS領域の倍音構造が判然としな

い。

(1/12)Oct 法の結果を示したのが④である。精度を 4 倍にすると、FFT と同様の周波数位置にピークがあることが判る。

これらから、IS 領域に風車特有の風切り音の倍音が在ることが判る。

図 5 「高速回転の中央風車での分析図」に関連した補助資料と一緒に示す。



本文「図 5 高速回転の中央風車での分析図」のカラー表示が①である。

西端風車と中央風車の分析結果を同時に示したのが②である。定格回転数が異なるので IS 領域での倍音構造は異なるが、LFS 領域での共通の 60、100Hz 音がある。また、其々の風車に固有の音があることが判る。

IS 領域の音が、20rpm と高速回転する中央風車では、14rpm の中速回転する西端風車よりも、10dB ずつ高いことが判る。

日中暗騒音を示す③は、工場が休止している曜日に、全 3 基の風車が停止した条件で測定した。IS 領域の音は赤線で示した様に、40dB を越えていないのが判る。

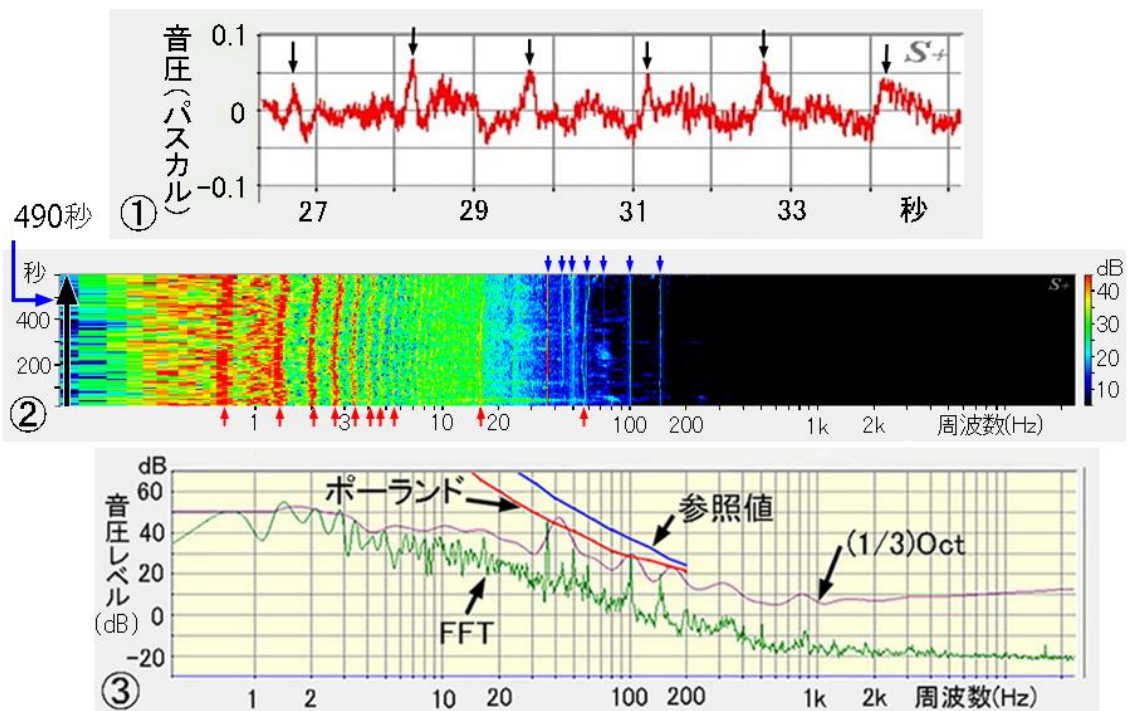
日中暗騒音に対し、IS 領域で、西端風車では最大 20dB、中央風車では最大 30dB 上回った音を出していることが判る。

本文「図 6 石狩被害者宅内原音」、

「図 7 被害者宅内の FFT 法による全時間分析図」、

「図 8 両分析法の 490 秒時の断面図」

に関連した補助資料と一緒に示す。



本文の図 6 に対応するものが①である。突発音の時間幅は 0.2 秒ほどであるのは西端風車の場合とあまり変わらないが、上下幅は最大で 0.1Pa ほどと、西端風車の場合の 1/3 程になっている。定格回転数になっていない条件であるが、被害者宅から風車までの距離を明示すると、個人を特定されて、被害者本人が望まないのに、これ以上は触れられない。

本文の図 7 に対応するものが②であり、カラーの表示で音圧レベルの低い所も確認することが出来る。

本文の図 8 に対応するものが③である。②と③は、図の周波数をほぼ合わせてあり、ピーク位置の相関が判る。